週報
こひつじ
第39巻　2号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

最初の奇蹟

その二　エリエゼルが求めたもの

また、こんな記事も聖書にはある。

アブラハムのしもべエリエゼルは、あるとき主人から息子イサクの妻捜しを命じられるのだが、長い旅をして、ようやく主人の故郷にたどり着き、疲れ切ったからだを泉のほとりで休めていた。彼は思案した。いったいどうやってイサクにふさわしい女性を見つけることができるのかと。そこで彼はこう祈った。

「私は泉のほとりに立っています。この町の娘たちが、まもなく水を汲みに出てくるでしょう。私がひとりの娘に水を求めるとき、もしその娘が、私にだけでなく、私のらくだにも水を飲ませましょうと言ってくれたら、そのようなやさしい心をもった娘こそイサクのためにあなたが定められた女性であると私は判断しましょう」

イサクの妻の条件に、エリエゼルはたったひとつ「余分の親切」をあげたのである。

やがてひとりの女性が水がめを肩に載せてやって来る。

エリエゼルが彼女に水を求めると、彼女は喜んで、彼だけでなく、らくだにも水をやったのだ。

エリエゼルは確信した。彼女こそはイサクの妻となる人だと。

その女性が、リベカである。

こうしてリベカはエリエゼルのテストに合格し、偉大なイスラエル民族の母となる。

らくだにも水を飲ませるかどうか、それは実にささいなことではないか。が、それによってリベカは歴史に刻まれるような人生へと導かれていったのだ。

神は、このようにわれわれの日常の生活に見られるもてなしの心に大きな注意を払われる。奇蹟はそこから始まると言ってよい。

教会がまだ学生ばかりの頃だった。彼らは遅くまで教会でギターを弾いたり賛美したりしていた。

やがて夕食の頃になると妻は私に言う。

「教会には何人いるか、見て来て」

「三人」

と私が報告すると、彼女は、作っている量を増やして、三人を招いて夕食をした。あの頃は、夕食時に家族以外のだれかがいるということがあたりまえのようだった。

だからいつも夕食はにぎやかだった。

いつだか妻についての記事を週報に載せたことがあったが、それを読んだ長女の真紀が言った。せっかくだからお母さんの別の方面も述べて欲しかったと。

そして、こう書いてきた。

「それは、お母さんのホスピタリティ（もてなし）のことです。子どもの頃について私が今も懐かしく思い出すのは、家庭の食卓に教会の若い人たちがいつもいたことです。みんなでわいわいと食事をすることもありました。

核家族で子育てしていると、私の娘たちには、そういう体験がないのがかわいそうだと思ったりします」

妻のもてなしは、わが家の子どもたちにも、大きな影響を与えていたのである。

小さな大津町にプロテスタントの教会が誕生したのは奇蹟だと私は思っている。

それは私の説教によったと言うより、むしろ妻のもてなし、そしてそれを受け継いだ、この教会のもてなしの精神によったと言うほうが正しいと言えるだろう。私は今つくづくそう思うのである。（続）

週報
こひつじ
第39巻　2号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

最初の奇蹟

その二　エリエゼルが求めたもの

また、こんな記事も聖書にはある。

アブラハムのしもべエリエゼルは、あるとき主人から息子イサクの妻捜しを命じられるのだが、長い旅をして、ようやく主人の故郷にたどり着き、疲れ切ったからだを泉のほとりで休めていた。彼は思案した。いったいどうやってイサクにふさわしい女性を見つけることができるのかと。そこで彼はこう祈った。

「私は泉のほとりに立っています。この町の娘たちが、まもなく水を汲みに出てくるでしょう。私がひとりの娘に水を求めるとき、もしその娘が、私にだけでなく、私のらくだにも水を飲ませましょうと言ってくれたら、そのようなやさしい心をもった娘こそイサクのためにあなたが定められた女性であると私は判断しましょう」

イサクの妻の条件に、エリエゼルはたったひとつ「余分の親切」をあげたのである。

やがてひとりの女性が水がめを肩に載せてやって来る。

エリエゼルが彼女に水を求めると、彼女は喜んで、彼だけでなく、らくだにも水をやったのだ。

エリエゼルは確信した。彼女こそはイサクの妻となる人だと。

その女性が、リベカである。

こうしてリベカはエリエゼルのテストに合格し、偉大なイスラエル民族の母となる。

らくだにも水を飲ませるかどうか、それは実にささいなことではないか。が、それによってリベカは歴史に刻まれるような人生へと導かれていったのだ。

神は、このようにわれわれの日常の生活に見られるもてなしの心に大きな注意を払われる。奇蹟はそこから始まると言ってよい。

教会がまだ学生ばかりの頃だった。彼らは遅くまで教会でギターを弾いたり賛美したりしていた。

やがて夕食の頃になると妻は私に言う。

「教会には何人いるか、見て来て」

「三人」

と私が報告すると、彼女は、作っている量を増やして、三人を招いて夕食をした。あの頃は、夕食時に家族以外のだれかがいるということがあたりまえのようだった。

だからいつも夕食はにぎやかだった。

いつだか妻についての記事を週報に載せたことがあったが、それを読んだ長女の真紀が言った。せっかくだからお母さんの別の方面も述べて欲しかったと。

そして、こう書いてきた。

「それは、お母さんのホスピタリティ（もてなし）のことです。子どもの頃について私が今も懐かしく思い出すのは、家庭の食卓に教会の若い人たちがいつもいたことです。みんなでわいわいと食事をすることもありました。

核家族で子育てしていると、私の娘たちには、そういう体験がないのがかわいそうだと思ったりします」

妻のもてなしは、わが家の子どもたちにも、大きな影響を与えていたのである。

小さな大津町にプロテスタントの教会が誕生したのは奇蹟だと私は思っている。

それは私の説教によったと言うより、むしろ妻のもてなし、そしてそれを受け継いだ、この教会のもてなしの精神によったと言うほうが正しいと言えるだろう。私は今つくづくそう思うのである。（続）